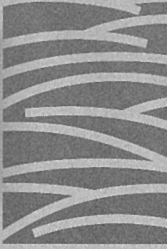


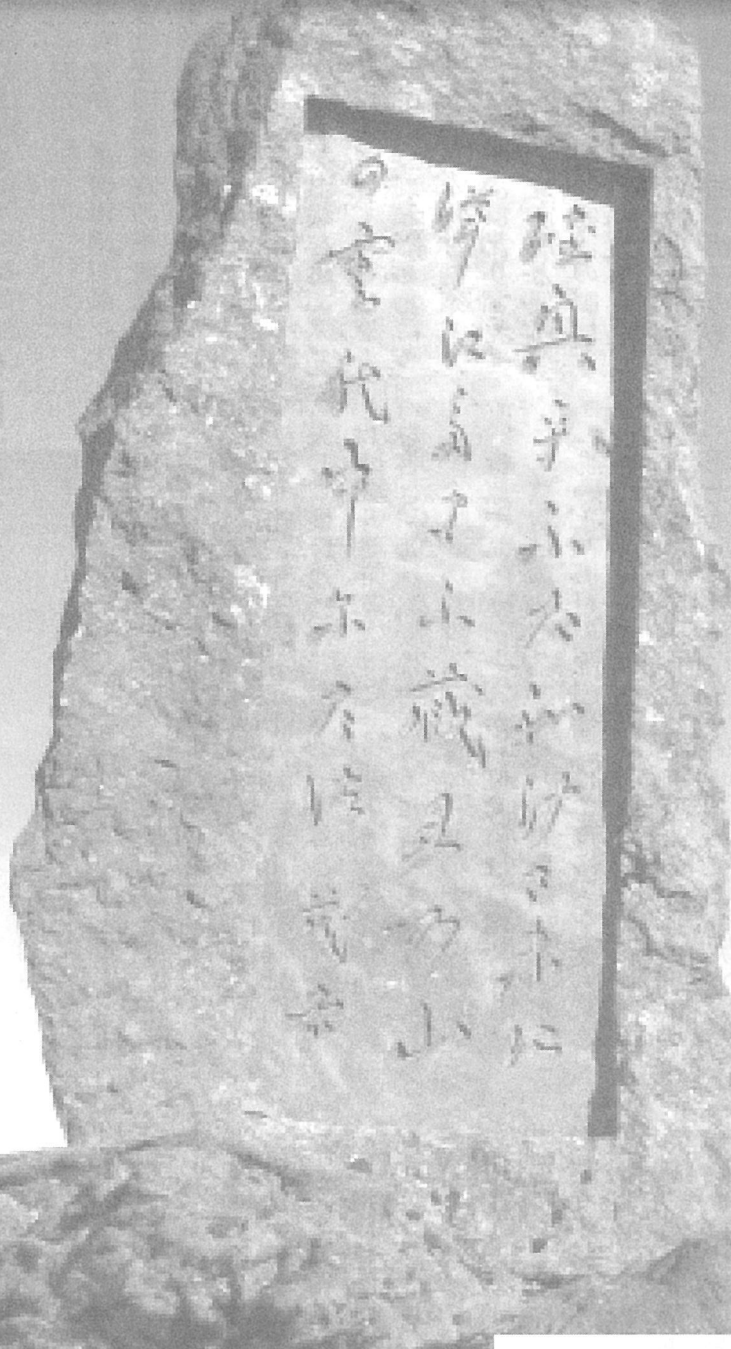
茂吉記念館だより

Vol.19
2016 / 12 / 15



Mokichi Saito Memorial Museum

蔵王山頂(熊野岳)に建つ斎藤茂吉歌碑(昭和九年建立)
陸奥をふたわけさまに響えたまふ蔵王の山の雲の中になつ 茂吉
歌集白桃所収



目次

- ・寄稿/柴生田俊一「書齋と童馬山房」 - 2
- ・寄稿/梅内美華子「絵画をうたう源流としての茂吉短歌」 - 4
- ・寄稿/森田 溥「かぎりも知らに雪ふりみだる
-『白き山』と『斎藤茂吉随行記]-」 - 6
- ・館長随想「新資料 渡辺幸造宛未発表斎藤茂吉葉書 27通」 - 8
- ・定例歌会概要「第8・9・10回」高得点作品 - 10
- ・資料紹介「新たな収蔵資料から」 - 11
- ・出版情報・短信(掲示板)/編集後記 - 12

斎藤茂吉は、歌作りをはじめ、文学と医学面での研究、書家としてなど、何事にも一生懸命全力で取り組む人であった。蔵王山頂の歌碑建立に際しても例外ではない。最初は本意ではなかった茂吉も、実弟の説得に漸く応じ、建てることを決めてからの熱意はもの凄い。碑のための作歌と揮毫、建立作業にあたる石工にまで心構えを伝えるなど、細部にわたり徹底した準備を行った。その茂吉の限りない努力の甲斐もあり、強風雪が常に吹き荒ぶ劣悪な環境下の山頂にあつて、建立後八十数年間にわたり、変わらぬ姿を今なお保ち続け、我々に堂々とアピールしている。歌碑の存在は、まさに茂吉そのものであるように感じる。当記念館も開館後もなく半世紀を迎えるが、茂吉の精神を受け継ぎながら、不変の佇まいと内容を継承して参りたいと今更ながら思う次第である。

斎藤茂吉記念館館長 秋葉四郎



▲Photo・左より蔵王山頂歌碑建設工事と建立除幕式(昭和九年)・斎藤茂吉の歌碑行(昭和14年)4景

書齋と童馬山房

柴生田 俊一

大正三年三月、茂吉は帝国脳病院の土蔵二階から、青山脳病院に引っ越した。そのラジウム風呂二階の部屋で、大正四年三月、随筆『書齋』を書き、雑誌『新潮』三月号に寄稿した。

林泉を具した庭の中に小さな土蔵を建て、そして童幼と女人の聲とを遠ざけてゐる。窓は従来の土蔵窓よりも大きく、東と南と北に明いてゐる。豊の上に大きい日本机を据ゑ、机は室の一方にあつて背が後壁にひたりと凭りかかれるやうに出来てゐる。洗面所と便所とは直ぐ近くにあるし、人工的に室温の調節が取れるやうになつてゐる。ぐるりに書架が作られ、大體は圖書館式であるけれども、一部は、硝子障子のあ



青山(帝国)脳病院正面入口 茂吉の養父齋藤紀一経営の精神科病院 大正13年末焼失

るのもあり、また一部は押入式襖でかくれてゐるところもある。この土蔵は廊下傳で家庭に續くが、廊下は火で直ぐ焼けるやうなことはない。呼鈴を鳴らせば、細君が甲斐甲斐しくやつて来て書物の出入れなどの世話も

する。一隅に床の用意があり、初夏の候には蚤の繁殖を薬品を以て防ぐ。この假定の書齋は、大凡客間に使ふやうなことは無いのである。大正十三年十二月二十八日、青山脳病院は焼

失し、焼け残った二階屋の一階風呂場で、茂吉は大正十四年二月十一、十二日、『癡人の癡語』を書き、雑誌『女性』四月号に寄稿した。

「1」此の病院も創立當時はあのあたり一面は原であつた。それから直ぐ隣は墓地でそれも墓石は極めて稀であつた。また續いて畑があつた。肥料の匂が風のまにまに漂つて来る。それから一段低い處は一面の稲田で目高が群れて泳いで居たり、水の温むころは蛙が思出したやうに浮いて來たりするのであつた。ある時私は崖の土から冬眠してゐて未だ醒めない蛇を掘り出したことなどもある。さういふ處にぼつりと青山脳病院が建つたのであつた。日露戦争がだんだん劇しくなつたとき、私の長兄が秋田の第十七聯隊から出征して、途中新宿の停車場で一吋下車するといふことであつた。そこで私は新宿の停車場に出かけて夜半まで待つてゐても到頭汽車は著かなかつたので、その時私は間道を通つてやうやく建つたばかりの脳病院に歸らうとして、道に迷つて夜ぢゆうさまよつたことを今想起する。何

でも月の明るい晩で、夜半を過ぎててもこの月明りで農夫が稲を刈つてゐるあたりを通つて道をたづねたことなどを今想起する。「2」その稲田が埋立地になり、私も随分ながく住んで、『童馬山房』などと名づけた家が、その埋立地に建つたのであつた。病院と相對する向うの丘は一部は森林で一部は墓地であつた。

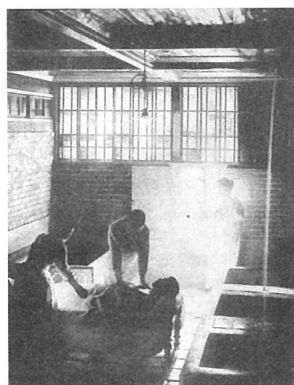
そこで歩兵が小さい演習をしたり、喇叭の譜の稽古したりするのが手にとるやうに見えたものである。満洲に出征した長兄は黒溝臺と奉天で傷を負つたが、それでも生きながらへて歸つた。ところが長兄の屬した軍の司令官であつた立見將軍は戦争後病で歿して青山脳病院の直ぐ隣の墓地に葬られた。長兄が上京して來て將軍の墓前にぬかづいて暫く詞のなかつたことなどを今想起するのである。

齋藤紀一は明治三十六年五月、赤坂区青山南町五丁目二、七〇〇坪余の土地を購入し、建坪二五〇坪の脳病院建設に着手した。同年九月、第一期工事が終ると、青山脳病院を開院し、茂吉を除き、家族全員を浅草から青山に移した。

紀一は表通りに沿つて、まず二、七〇〇坪を借地し、第一期工事として四五〇坪の建物を完成させ、次いで、その裏手の一、八〇〇坪を借屋を用意した。三十坪ほどの家の二階には、歌会などを開けるやうに八坪ほどの大広間を設けた。この大広間を茂吉は、後に勉強室兼寢室兼書庫として使い、よほど親しい人でも、決してこの部屋に入れようとしなかつた。この大広間是一部焼けただれていたので、その修理ができるまで、茂吉は階下のタイル張りの風呂場に勉強机を持ち込み、ここを書齋にした。この書齋から『癡人の癡語』などが生れた。

この家に後年、八畳二夕間、六畳二夕間、浴室応接間を付け足したのが、戦争で焼けるまでの茂吉一家の形態となつた。十六畳敷の二階大広間は板の間として使用した。洋風のドアを開けて入ると、鉄製の寝台があり、常時白いカヤが張つてあつた。寝台の枕側のさきに畳が三枚ほど敷いてあり、その前に座布団が敷いてあつた。勉強机の前は北向きの窓となつていた。木の書架が四つか五つ立ち並んで、周囲の壁面はすべて造りつけの書棚で埋められていて、天井近くまで達していた。ラジウム風呂に入るには焼け跡を百メートルほど歩いていかなければならなかつた。

やけのこれる家に家族があひよりて納豆餅くひにけり 『ともしび』
かへりこし家にあかつきのちやぶ臺に火燄の香する澤庵を食む 『ともしび』



青山(帝国)脳病院内のラジウム風呂

院の焼け跡に立つた。紀一は茂吉の帰朝に備えて、病院の敷地の西の隅に白タイル張りの二階

地し、増築工事を重ねた結果、最終的には二、〇〇〇坪の国内最大の私立病院にした。借地は表通りから裏手へ下り勾配の傾斜地になつていて、一番高いところに本館があり、裏手に向つて、病棟が段々に並び、裏口近くの一番低いところに、炊事場と病室看護棟があつた。炊事場と手前の病室棟の間に煉瓦造りのラジウム風呂があつた。

茂吉は一高の寄宿舎を出て、神田和泉町の帝国脳病院の土蔵二階に独居していたが、二、〇〇〇坪の青山脳病院が完成すると、明治四十年九月、青山脳病院に移り、この煉瓦造りのラジウム風呂の二階に独居した。

茂吉の「書齋」は帝国脳病院の土蔵二階から、青山脳病院のラジウム風呂二階に移り、大正三年四月、てる子と結婚してからは、崖下の竹藪越しに裏町通りを見下ろす病室看護棟二階になつた。茂吉は大正三年四月から大正十年十月末、渡欧するまで、この裏口近くの病室看護棟二階を夫婦二人の住処とし、「童馬山房」と称した。大正五年三月、長男茂太が生まれたが、茂太はすぐ婆やの松田ヤヲに預けられ、炊事場近くの居住区にいた。

次の歌は煉瓦造りのラジウム風呂の二階に独居していた時、詠んだものである。殆ど給仕するものなして朝食を濟ませ、巢鴨病院に通つていた。

ひとり居て朝の飯食む我が命は短かからむ
と思ひて飯はむ 『赤光』

次の歌は、結婚して裏町通りに面した「童馬山房」で詠んだものである。

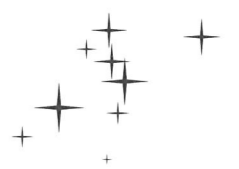
めん雞ら砂あび居たれひつそりと剃刀研人は過ぎ行きにけり 『赤光』
墓地かげに機關銃のおとけたたましすなはち我は汁のみにけり 『あらたま』
こもらへば裏町どほりの遠近に疊をたたき音のさびしさ 『あらたま』

日露戦争勃発当時、茂吉は一高の寄宿舎にいた。明治三十七年九月、長兄広吉が第八師団の第十七連隊(秋田)を出征して、新宿駅を通過して大阪に向かうと聞き、新宿の停車場に行った。会うことができず、間道を通つて、青山脳病院に帰ろうとしたが、稲田に迷い込んでしまった。広吉は黒溝臺と奉天で負傷したが、三十八年十月無事帰還した。第八師団の立見尚文司令官(凱旋後大将)は大正三年病没し、青山脳病院下の立山墓地に葬られた。広吉が上京して、將軍の墓前にぬかづいて暫く詞がなかつた。

大正十三年十二月二十八日、青山脳病院は焼失し、茂吉とてる子は大正十四年一月五日、病

絵画をうたうー源流としての茂吉短歌

梅内 美華子



短歌で絵画や彫刻などの美術作品をモチーフにした作は多い。色彩や構図、造形などからインスパイアされたもの、あるいは絵がもっている物語や思想などを積極的にうたおうとしていることが見られる。短歌に詠まれた美術を考えると、思い出すのが斎藤茂吉の作である。茂吉と絵画については片野達郎(茂吉記念館前館長)の詳しい研究によって教えられるところが多い。

浄玻璃にあらはれにけり脇差を差して女をいぢめるところ 斎藤茂吉『赤光』

赤き池にひとりぼつちの真裸のをんな亡者の泣きあるところ

にんげんは牛馬となり岩負ひて牛頭馬頭もの追ひ行くところ

をさな児の積みし小石を打くづし紺いろの鬼見てあるところ

「地獄極楽図」と題する明治三十九年の作。

茂吉の故郷、金瓶村の宝泉寺の地獄絵をもとに作っている。地獄絵を見たことがある人ならこれらの歌に描かれている光景を思い描くことができるだろう。地獄という陰惨で哀れな仏教的世



斎藤茂吉の郷里金瓶の生家(左)と菩提寺の宝泉寺(右) 昭和10年頃

しい観念の世界に対して、茂吉が吸い寄せられるように目を近づけ凝視していた姿が彷彿としてくる。地獄絵を食い入るように見て、言葉を紙に勢いよく書いていくような。

しかし、この連作は絵を見てからあまり時間がたたないうちに書かれたものではなく、記憶を掘り起こして書かれたものだという。片野は、茂吉が渡辺幸造に宛てた書簡からその事実背景をつきとめている。

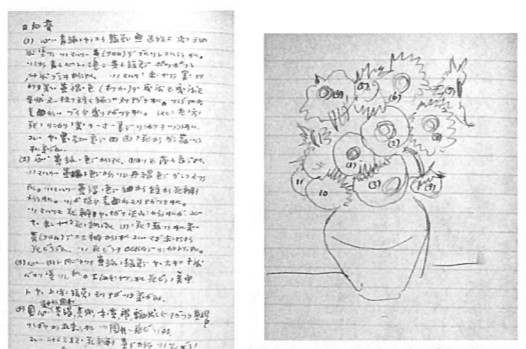
「東京にきてから十年も経、それ以来寺の掛圖も見たことなく忘れがちになり居るゆるゆるの思ひ出に作つて置く考フト起り五月十日の夜に作つて見た處に御座候へき」

木のもとに臥せる佛をうちかこみ象蛇どもの泣き居るところ
屋根の無き屋形のうちに男君姫君あまた群れるところ

絵画を題材にしていること、結句を「ところ」で止める表現に子規の影響が顕著である。子規の歌から何かをビビッと感じ、茂吉の中に眠っていた記憶が呼び覚まされたのだ。子規の歌はどんな絵画を見たのかについて書き記されていない。片野によると二首目は涅槃図であり、三首目は吹抜屋台と思われ源氏物語絵のようなものと推察している。複数の絵が題材になっているのだ。そして茂吉の取り組みは故郷で幼いころから見ていた地獄絵に直線的に向かい、絵の世界に集中している。少年の目に焼きついた死後の世界、罰を受けて虐げられる怖ろしい世界へ遡行し、それを言語化する体験と時間の積み重ねを経て生まれた連作であった。そこには絵の細部の発見があり、大人になった茂吉の内部で醸成された幻想がある。

ゴッホの自画像みればみちのくに山蚕殺ししその日おもほゆ 斎藤茂吉『赤光』

代表作の一つ。「白樺」大正元年十二月号にゴッホの「帽子をかぶった自画像」が掲載された。そのモノクロの複製図版を見て作られた



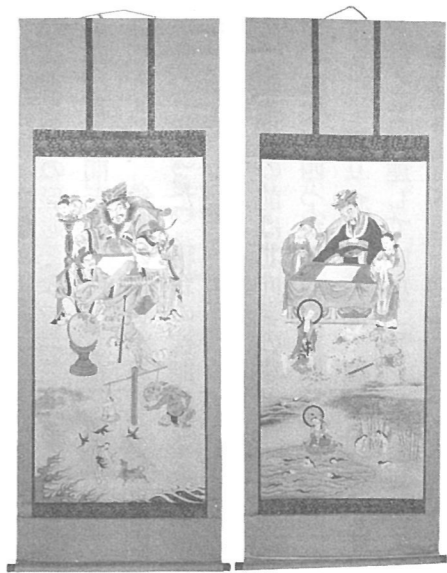
斎藤茂吉の手帳に描かれたゴッホ「向日葵」のスケッチと特徴を記したメモ(大正13年3月23日) ドイツ・ミュンヘン 新国立美術館にて

とされている。ゴッホの絵は謎めいた表情をもつ。生きていく喜びとは程遠い翳りをもち、いらだつたような疲れたような顔をこちらに向けている。茂吉のこの歌には地獄絵が教える宗教的な色彩や、哀れで妖しい世界とは違う、ゴッホの絵が放つ個性や体臭のようなものと対峙した濃密な気配や匂いがある。導き出された下の句がそれを表している。嗜虐的な行為をした幼い日の暗く火照る衝動。この生々しい告白はゴッホの個性と十分に釣り合い、ゴッホの自画像と茂吉はもはや切り離せないものとなった。絵画との対話によってなされた自我の表出という点で近代短歌に新しいモデルを作り出したといえるだろう。

印象派などの絵画からの影響は他に北原白秋、前田夕暮らの作が知られる。ミレー「種まく人」を詠んだ白秋、ゴッホの「向日葵」を詠んだ夕暮。彼らの歌には自然美の発見や調和的な抒情、画家の精神や生き様に目を向けている。

(明治三十八年五月十三日)
と茂吉は記している。

記憶をもとに一気呵成に書き上げ、さらに改作を経て掲出歌のような形になる。掛図は一幅



茂吉の生家菩提寺の宝泉寺所蔵「地獄絵掛図」「地獄極楽図」全11点は宝泉寺にて年2回(1/16・8/16)のみ公開される

だけではなく書き出した場面も一つではない。茂吉の脳裏に深く刻まれた鮮烈な体験であったことがうかがわれる。

そしてこの連作は正岡子規の歌に触発されて作られたものである。「竹乃里歌」を読んで作歌を志した茂吉は、その中の「絵あまたひろげ見てつくれる」(明治三十二年作)の形を真似たのであった。

もんごるのつはもの三人二人立ちて一人すわりて楯つくところ 正岡子規『竹乃里歌』

あかあかと一本の道とほりたりたまきはる我が命なりけり 斎藤茂吉『あらたま』
この歌にゴッホの太陽を重ねて見、「鎮痛なる風景を照らした」と評したのは芥川龍之介であった。しかし茂吉自身、どの絵をモチーフにしたのかはわからない。ヴィジュアルイメージを具体的に絞りこまず、単純かつ象徴的な景としたことが壮大な下の句と響きあっている。

茂吉をはじめとする西洋絵画と出会った近代短歌は景と人間の関係を拡大したといえるのではない。その流れにある現代短歌を見渡すと、絵画と対峙して独自の解釈や感覚に根ざした表現が生まれていることに気付く。そこには自分一人では見ることが叶わない景色に出会った緊張と愉悦があり、芸術家同士の共鳴と思索を深めているようだ。

口ゆがむまでにかき愛みごもりしモノ・リザ、
釵のごとき手組める 塚本邦雄『日本人霊歌』
糸杉がめらめらと宙に攀ぶる絵をさびしく
こころあへぐ日に見き 葛原妙子『飛行』
ムンクいま森をぬけ出て橋わたる耳なりじ
ーんといびつな月下 加藤克己『球体』
ゲルニカの牛昏き目をみひらけりデモ隊街
にもつ勝利の錯誤 馬場あき子『無限花序』

うめないみかこ 歌人かりん

かぎりも知らずに雪ふりみだる 『白き山』と『斎藤茂吉随記』

森田 溥



斎藤茂吉の歌集にふれるとほっとする。ぎすぎすした表現の一切ない自然な詠みに心がなごむのである。茂吉には多くの歌集があるが、特に『赤光』と『白き山』にその感が深い。中でも『白き山』は、同じ雪国に住むものとして格段の興趣を覚える歌集である。

茂吉は、終戦前後の疎開先山形県上山の金瓶かながらで、事情により転居のやむなきに至っていた。長年、短歌の道での師弟関係にあった大石田の板垣家子夫いちはらがこれを耳にし、茂吉の大石田移居を勧めたのである。

板垣家子夫は、明治三十七年生まれであるが、大正十年頃より作歌を始め、同十四年、「アララギ」に入会していた。昭和六年には上京して茂吉宅を訪問し、短歌の教えを受けたこともあり茂吉とは諸々の繋がりで交友を深めていた。茂吉は、金瓶疎開の頃より大石田を訪れ、板垣他大石田町民と親しくなっていた。その縁もあって、板垣初め町民の多くが茂吉の大石田移住を歓迎したのである。

茂吉の大石田移住は昭和二十一年一月三十日。同二十三年十一月三日に帰京するまでここに住んだ。板垣は、この大石田時代、ほとんど茂吉の赴くところを同道しており、その間の諸々のことを詳述した著作を残している。板垣の執筆



斎藤茂吉 冬の大石田最上川畔にて(昭和21年2月)

入った光景である。時は厳冬の二月。山はまさに『白き山』だったのである。雪国に住みながら

二首目の歌は茂吉会心の作であろう。「紅色の靄」の言葉には茂吉のこだわりがあったと思う。ここで注目したいのは、歌が詠まれたこの日の日記と『斎藤茂吉随記』の板垣の記述である。朝早く、最上川べりに散歩に行ったその日の様子や会話が詳細である。日記には「大石田ノ日出ヲ見タ」と記した後「最上川ノ川原ノ方ニ歩ミ、歌ヲ少シ考ヘタ」と記されている。

『随記』では、当日の最上川の様子を板垣は「川の上には低く濃い靄が立ちのぼっていた。靄の上には黎明の冬空が澄んでいて、川の流

れの音が靄の中からしているように聞こえる」と記している。その後の茂吉との問答の中で、紅色の靄を見たことがあるかと問われて板垣が曖昧な返事をしていると、茂吉は「板垣君、君のように最上川の側で生まれてもそういうものはないもんだつす。われわれ歌作りがなかなか進歩しないのも、つまりこうした周囲に慣れて、注

による『斎藤茂吉随記』である。これは茂吉の大石田時代を知る貴重な資料である。昭和五十八年刊行の上下二巻、九百九十一ページに及ぶ大冊である。ご子息の医師で歌人の金子阿岐夫あきによると、「父は母の逝去の一年後、その傷心をまぎらわすためにこの執筆を思い立ったのだろう」と記している。この記述は、昭和三十八年十月から同五十六年十一月まで東北アララギ「群山」に百八十五回にわたり連載されて好評を博した。手元にある随記を今回改めて繕いてみた。茂吉の大石田時代の全てを知る記述の貴重さが十分に分かる思いがした。茂吉と板垣他の町民との会話も方言で時には飄逸さを感じられるが、『白き山』のそれぞれの歌の背景は茂吉全集の大石田時代の日記と相まって詳細に知ることが出来る。

初版本とは多少の違いがあるが、改めて『斎藤茂吉全集』第五巻の『白き山』を読んで見た。雪深い北国の厳しい暮らしと戦後の茂吉の沈痛な心境が重なり読むものの心を強く打つのであるが、何よりも雪国の自然と生活の透明で純粹な描写が心を打つ。それは都会の匂いの一切ない、まさに一地方の素材そのものに浸る暮らしを詠んだ歌である。表現も硬質の漢語調やカタカナ語もなく極く自然な和語の世界で心にひびく。

意を払わないからだつす」といい、更に「歌の材料というものは、心構えが大切で、よく注意して観察するといくらでもある。それを不注意だから見逃してしまふ」と論じているのである。この数ページの記述は、歌集『白き山』の茂吉自身の作歌の姿勢を象徴的に語っているような会話で見逃しがたい。

雪の降る状態にはいろいろな姿がある。歌集には雪の歌が実に多い。雪の降る様を流れにそって幾首かを拾ってみよう。しづけさは斯くのごときか冬の夜のわれをめぐれる空気の音すまどかなる雪の降りかも日をつぎてつもらむとする雪の降りかもしづかなる空合となりをやみなく降りつもり来る雪のなかに立つ

かりがねも既にわたらずあまの原かぎりも知らに雪ふりみだる最上川逆白波のたつまでにふぶくゆふべとなりけるかも

一首目は雪の降る前夜の静けさであろう。二首目は降雪の気配を感じる夜のしじまである。三首目の歌は小止みなく降る日なかの雪であり、次第に四首目のような雪の降りようになってくるのである。後の二首は二十一年十二月頃とされるが、日記によると十二月十七日前後は大雪

その感動の幾つかを挙げてみると何と云っても最上川の歌、雪国の雪そのものと暮らしの歌、虫や鳥類草木の歌、蔵王鳥海他の山々の歌などに自然で清澄そのものの詠みを感じるのである。戦後の世評の中で心中穏やかではなかった茂吉であるが、雪は万物を白一色にして全てを無にする。その感を深くするのはまさに冬の雪の歌である。雪国に生まれ住んでいるものにとって雪の中の暮らしは極く普通であり、雪そのものの観察や描写は見逃してしまう。そういう意味で茂吉の大石田の歌の、特に冬の自然観入の深さには驚くばかりである。

雪ふりて白き山よりいづる日の光に今朝は照らされてぬきさらぎの日いづるときに紅色の靄こそうごけ最上川より

一首目は、冒頭部の「紅色の靄」一連の最初の歌である。歌集名に関わる歌でもあろうが、この歌が歌集の冒頭部にあることは見逃せない。『斎藤茂吉随記』は茂吉の疎開地金瓶の暮らしから大石田へ移るまでのせわしげな記述から始まるが、この歌は大石田に移って作歌を始めた最初の頃の歌である。見えなくなった蔵王を忍びながら、初めて大石田の周囲を見渡して静かに見

大雪の記述が続く。『随記』によれば、十二月に入って九日から暮れ近くまで大雪が続くと記され、連日の大雪の様子が書かれている。板垣は十七日の記述に「昨日につづいて今日も雪、このところ毎日雪と吹雪の日が繰り返されている。何ともしようのない陰惨で寒い日日である。これが多雪地大石田の真冬の姿といえるだろう」と記す。四首目の歌は、北国の雪の降り続く厳しい自然を詠んでこれほどの秀作はないと思う。森羅万象雪一色の無音の時空である。しかし『随記』で板垣の記した「陰惨な雪の日」でも、茂吉は実にいい韻きの歌に昇華しているのである。最上川の歌も、冬の厳しさの極限を詠んだ秀作である。「逆白波」の語は、茂吉の造語であり、特に心に温めていたという逸話も記憶に新しい。この自然描写の秀逸は類を見ない。

歌集『白き山』は、冬の雪の自然の深い観入に特質があり、「紅色の靄」問答にあるように、雪国の人でもつい見逃してしまふような自然の確かな捉えが卓越である。

詩情の感じられない歌集の多い昨今、『白き山』の純粋な詩の韻きは貴重である。もりた ひろし 歌人「青南」



秋田旅行の帰途 大石田にて(昭和22年6月) 左より板垣家子夫・茂吉・結城真草

新資料

渡辺幸造宛未発表斎藤茂吉葉書二十七通

秋葉四郎



神田帝国脳病院より

渡辺幸造は、開成中学校時代、高校・大学（一高・東大）時代を通じての親友で、銀行家として活躍するようになってからも医師・歌人の茂吉と深い交流があった。殊に渡辺幸造は、学生にして草童と号し俳句の作者であり、短歌にも見識があり、茂吉の作歌初期に深く影響を与えている。少年、青年、壮年を通して茂吉に深い影響を与えた一人である。

手紙の交流も多く、『斎藤茂吉全集』の書簡編に収められているものだけでも、総数一七通にのぼり、うち明治大正時代のものが、一〇三通である。茂吉の人と芸術の形成にいかに関係したか、極めて重視されることである。今回その一七通以外の二十七通を入手したので、逐次、様々な機会をとらえて資料提供して参りたい。※現代通用漢字に改めて表記する。

① 明治四十年五月十九日山田村渡辺幸造兄、



③ 明治四十年八月二十一日山田村渡辺幸造兄、伊豆戸田御浜保養館より

拝啓 小生は廿四日の朝戸田を出発し沼津に行きソレカラ国府津に一泊する考ニ御座候。神保も同道に御座候。御都合よろしく候ハバ国府津で又会ひ申す事が出来るべく楽しみ居り候。

沼津でうなぎでも食ふ考ニ御座候。頓首

絵葉書裏面は、戸田前景で、手前に集落、その先に湾が続く写真。右上に「東京帝国大学運動会水泳部・豆州戸田湾」の記念スタンプが捺されている。

その後御無沙汰いたし候。趣味の歌御誉め下さりありがたく存じ申候。兄の一首と僕の一首勾玉日記に出して下さり度申候。ソレカラ今頃は養蚕よほど御多忙と存じ申候が日朝新聞の募集に応じて下さり度願上候。小生も考へ居り候へども一ツモ今の処出来申さず候。其の中五ツばかりも製造いたしたいと存じ居り候。ソレカラ趣味へも是非御投惠願上●（候）の省略記号也。其後学校を休み居り小林兄とも逢ひ申さず候。この間三四日ばかり風にやかれ大変き申候。今日から又勉強をは（じめ度）候。兄の御言葉通り身体だけは一生懸命に大切にいたすべく候。試験は来月の十日から三十日までに御座候。森鷗外氏宅の新派歌人の会合はおもひの外議論あるやにきゝ及び候。先生は彼等の歌を三回とも一首もとらず根本に於て一致を欠くと

明言せらし由二候。その中日本で歌論をせらるゝ由二候。余は后便で申上べく候。頓首

写真はその葉書、煙草の火であるうか、六か所も焼けた跡がある。しかし、内容は森鷗外の観潮楼歌会の様子を伝えていて貴重である。

② 明治四十年八月九日山田村渡辺幸造様、伊豆戸田港御浜保養館大学水泳部内より

みちのくの山べにゆかずに伊豆のくに戸田の荒磯に蟹をたのしぬ

まばらひげいやのびのびこの日ごろ潮を浴みつゝ妹もおもはず（次頁の写真参照）

藤岡武雄著『年譜斎藤茂吉伝』に「明治四十年八月伊豆戸田の東大水泳部保養館に神保孝太郎らと水泳に行く」という記事がある。東大在学中の葉書であり、作品が二首あるのはとりわけ注目される。

⑬ 大正六年十月二十二日山田村渡辺幸造様箱根五段より

⑭ 推定大正七年二月二十一日山田村渡辺幸造様長崎金屋町より

⑮ 推定大正七年七月二十九日山田村渡辺幸造様長崎東中町より

⑯ 推定大正七年十月十五日山田村渡辺幸造様長崎金屋町より

⑰ 推定大正七年七月二十九日山田村渡辺幸造様長崎東中町より

⑱ 推定大正七年十月十五日山田村渡辺幸造様長崎金屋町より

⑲ 推定大正七年七月二十九日山田村渡辺幸造様長崎東中町より

⑳ 推定大正七年七月二十九日山田村渡辺幸造様長崎東中町より

㉑ 推定大正七年七月二十九日山田村渡辺幸造様長崎東中町より

㉒ 推定大正七年七月二十九日山田村渡辺幸造様長崎東中町より

㉓ 推定大正七年七月二十九日山田村渡辺幸造様長崎東中町より

㉔ 推定大正七年七月二十九日山田村渡辺幸造様長崎東中町より

㉕ 推定大正七年七月二十九日山田村渡辺幸造様長崎東中町より

㉖ 推定大正七年七月二十九日山田村渡辺幸造様長崎東中町より

㉗ 推定大正七年七月二十九日山田村渡辺幸造様長崎東中町より

あきばしろう（館長）

第8・9・10回 定例歌会

8/24・9/8・10/11/6

茂吉記念館事業として定例歌会第八回平成二十八年四月二十四日・第九回八月二十八日・第十回十一月六日、記念館内集會室を会場に行いました。各回とも、参加者が事前に一人一首の短歌を一覧化（名前を伏せ）し、気に入った短歌を五首投票し得点数で順位を決めました。時間の都合上参加者の感想は上位得点のみとし、全作品について講師の秋葉四郎館長から丁寧な歌評をいただきながら進歩しました。初心者・実作者・居住地域を限定しない超結社の歌会として、定員五十名を超し、限られた時間を有効に使い、充実した歌会になりました。以下各回の高得点作品と講師選作品を紹介いたします。（敬称略）



第9回定例歌会（平成28年8月28日）斎藤茂吉記念館集會室

- 第8回**
- *互選一位／幼子は片手を高く上に挙げ横断歩道に緊張の顔 小林美代子
 - *互選一位（同点）／言ひたき事口に溢れてをりながらことばにならぬ齢寂しむ 高橋アキ子
 - *互選一位（同点）／歌会に心満たされ館を出で茂吉の像に一礼をする 羽島多男

- *互選二位／はだれ雪ひかる蔵王を背景に翁草咲くわが庭のうち 加藤由紀子
 - *互選二位（同点）／仔牛逝く何んの前触なきま々に乳張る親の鳴き声いとし 原田俊一
 - *互選三位／「やばつい」ね山形訛りなつかしく桜花のしづく首筋に落つ 荒井ひらく
 - *互選三位（同点）／三人の子らは巢立ちてしづかなる節分の夜に妻と豆まく 沼沢 修
 - *互選三位（同点）／棧俵に腰を下ろして最上川を飽かず眺むる茂吉の幻影 早坂富美子
 - 秋葉四郎選／三人の子らは巢立ちてしづかなる節分の夜に妻と豆まく 沼沢 修
- 第9回**
- *互選一位／この春も南相馬に咲く桜愛づるひとさへあらず散り初む 早坂富美子
 - *互選二位／丹精の夏の野菜を地方紙に包みて送るレシビを添へて 武田恒雄
 - *互選二位（同点）／高原にれんげつつじの花ゆれて蔵王の峰は雲ひとつなし 沼沢 修
 - *互選二位（同点）／皮膚がんの再発告げられわが母は九十五歳オベ室に入る 加藤勝利
 - *互選三位／物足りて飽満の現思ひをり雑草の実も食みし戦も 高橋アキ子
 - *互選三位（同点）／牛に餌与へてしばし和み見る変はらぬ日々の続くを祈り 原田俊一
 - 秋葉四郎選／最上川より風の吹き来る実家にて父母の影偲ぶ夏の日 飯田節子

- *互選一位／「行つて来る」メールに残し五百キ口蜜蜂移動の息子旅立つ 安藤チヨ
 - *互選二位／山頂の茂吉に逢ひたる思ひにてふるる両手に歌碑あたたかし 加藤由紀子
 - *互選三位／刈り終へし田んぼの面は静かにて薫焼く煙南へたなびく 杜 匠一
 - *互選四位／大縄を跳ぶ五人の子はいつせいに宙に浮きをり大地を蹴つて 山川ひろみ
 - *互選五位／コンバイン理髪する如鮮やかに女子オペレーターは水稲を刈る 松木勝蔵
 - 秋葉四郎選／雲流るアイガー北壁見上げつつ今井通子を思いて歩む 富川静枝
- 【総評】**
- 「歌会も十回を重ね全体的に作品が良かった。自分の詠みたい事をしっかり詠み、近代短歌の最も手本になる斎藤茂吉の「実相観入」に近づくように、九十九パーセントの表現力でがんばってほしい。」と講師の秋葉四郎館長の総評をいただきました。歌会終了後、特別展「茂吉と戦争」の展示作品解説「ギャラリートーク」があり、遠方からの参加者・講師・運営関係者とともに楽しいひと時を過ごしました。



第10回定例歌会終了後の展示作品解説「館長ギャラリートーク」斎藤茂吉記念館特別展「茂吉と戦争」会場（守谷夫妻記念室）

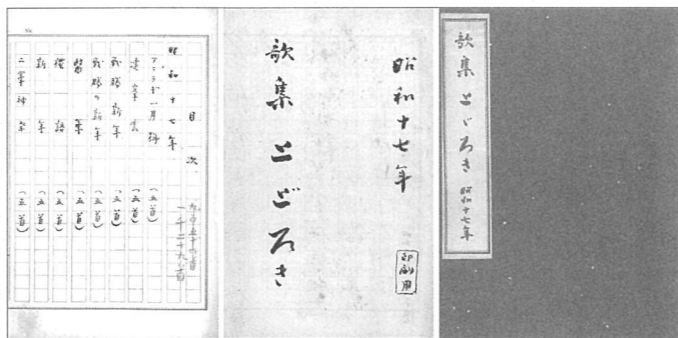
新たな

収蔵資料から

斎藤茂吉の旧蔵品として遺族から寄贈された資料のひとつに、茂吉の幾つかの戦争詠歌集の歌集がある。戦争と茂吉のかかわりをテーマとした特別展開催に伴い、とくにその中から昭和十七、十八、十九年の各年に作歌した歌をそれぞれ収めた歌集『とどろき』『くろがね』『昭和十九年』について調査を行った。

『とどろき』をはじめとする戦争詠歌集は、昭和二十年の終戦とともに未刊に終わったが、後年、茂吉自身によりそれらの歌集から平和な歌のみが抽出され、既刊歌集の『霜』と『小園』に収められている。しかし、抽出された歌がどれなのか、また戦争詠歌集はどこに収められていたのかは、『斎藤茂吉全集』第四巻の「短歌拾遺」で手がかりは掴めるものの明らかでなかった。そこで、戦争詠歌集の歌集と歌集『霜』『小園』とを比較することによって、茂吉の抽出作業とその意図の一端を明らかにすることを目的とした。

比較の結果から、主に次のことが分かった。第一に、『霜』の昭和十七年部分はほぼ全て、『小園』の昭和十八、十九年部分は全て、戦争詠歌集から抽出された歌のみで構成されていた。第二に、抽出は連作単位ではなく一首単位で行われていた。第三に、抽出された歌は、ほぼ戦争詠歌集の順序のとおり収められていた。第



斎藤茂吉の戦争詠歌集（昭和17年）歌集『とどろき』表紙・扉と目次

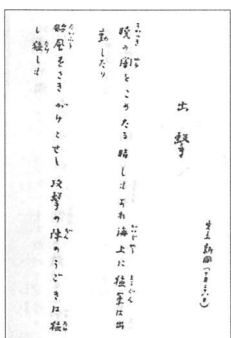
四に、抽出後に改作された歌が多数あった。特に「たかひ」という言葉は「世のなか」「うつし世」等に変えられていた。ここで『とどろき』と『霜』を比較すると、まず『霜』昭和十七年の冒頭五首（小題「新年頌」）は『とどろき』には見られない歌であり、新たに加えたものであることが分かった。また、小題「山中偶歌」中の一首「木瓜の実はまだ青しなどいへれどもやうやくにして夏は深まむ」も同様に加えられたものであった。ただ、「山中偶歌」の下書きが書かれている茂吉の手帳を見ても、その付近に「木瓜の実は……」のような歌は見られない。この歌をどこから持ってきたのかは疑問が残る。

『くろがね』と『小園』を比較すると、「闇ふかき夜としなりてわが心しづみにしづむ聲もたてなく」の一首が、小題「風」から小題「山上漫吟」に移動させられていた。小題「風」の一連には、「かくまでに涙ながれて聞くものかキスカ島より撤収報ず」があり、つまり心が沈むのは

日本軍が負けたからだだと捉えることができる。しかし小題「山上漫吟」は、箱根強羅での穏やかな生活を詠んだものであり、その一連の歌から心が沈む理由を推測することは難しい。この移動によって、心が沈む理由を意図的に曖昧にしたと考えることも出来るだろう。

『昭和十九年』と『小園』を比較すると、小題「茅原」で「君とふたり茅原に立ちてたかひのことを語りぬころ燃えつつ」を「君とふたり茅原に立ちてうつつなることを語りぬ汗ながれつつ」と改作している。詞書によると、これは千葉県市川市真間の旧木内邸に行ったときの作で、「君」とは平福一郎（歌友で日本画家の平福百穂の息子）のことである。改作前の歌から、彼と語り合った話の内容は戦争のことであり、さらに言えば厭戦的な話ではなかったことが考えられるだろう。

ここで取りあげた戦争詠歌集の歌集は、現在開催中の特別展「茂吉と戦争」未刊の戦争詠歌集を中心として、において平成二十九年三月三十一日まで展示している。是非ご覧いただきたい。



戦争詠歌集（昭和19年）



戦争詠歌集（昭和18年）『くろがね』

（文責）学芸員 後藤明日香

出版情報

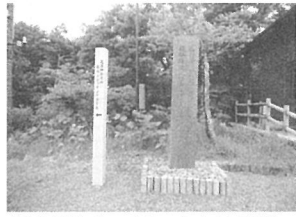
◆斎藤茂吉にかかわる図書
◆小泉博明『斎藤茂吉 悩める精神病医の眼差し』二〇一六年三月十日ミネルヴア書房刊

◆大島史洋『斎藤茂吉の百首』二〇一六年十一月十五日ふらんす堂刊

◆藤岡武雄『斎藤茂吉 生きた足あと』二〇一六年十一月二十日日本阿弥書店刊

短信

◆斎藤茂吉歌碑「新たな建立」
◆山形県山形市蔵王スカイケーブル中央高原駅隣に平成二十八年七月一日建立した。碑は活字で「山の峰かたみに低くなりゆきて笹谷峠は其處にあるはや」(歌集『霜』所収)が刻まれている。これは瀧山山頂の記念碑(木柱活字/平十四・九)と同じ歌で、茂吉瀧山蔵王歌碑保存会が今回新たに建立した。



斎藤茂吉歌碑 蔵王スカイケーブル中央高原駅隣

◆山形県山形市蔵王温泉蔵王四季のホテル玄関に平成二十八年十一月八日建立した。碑は活字明朝体で「ひさかたの天はれしかば蔵王のみ雲はこりてゆゆしくおもほゆ」(歌集『霜』所収)が刻まれている。これにより、斎藤茂吉の歌碑建立数は海外を含めた全国で一四三基となった。

講座事業

◆冬季特別講座「能楽と和歌・短歌」講師 友枝真也(シテ方喜多流能楽師) / 能の題材のひとつである「伊勢物語」を例に、能楽と和歌・短歌の関わりについて講演

つである「伊勢物語」を例に、能楽と和歌・短歌の関わりについて講演/期日 平成二十八年二月七日/会場 館内集会室/館長ギャラリートーク「正岡子規と能楽・斎藤茂吉と能楽」

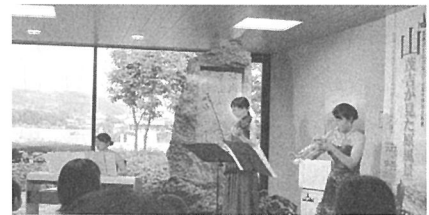
◆定例歌会(第八回、第十回) 当館の周知・誘客、短歌普及・実作向上などを目的とした超結社の歌会形式で、継続事業として三回実施した。第八回 平成二十八年四月二十四日(日)・事前投稿歌数五十首・参加者四十六人/第九回 同年八月二十八日(日)・事前投稿歌数五十首・参加者四十人/第十回 同年十一月六日(日)・事前投稿歌数五十四首・参加者四十五人・懇親会参加者三十五人。会場は各回共館内集会室。※高得点作品ほか詳細は本紙十ページに掲載。

特別展

◆「茂吉と絵画 西洋美術に見る写生」 斎藤茂吉の「アララギ」表紙画解説原稿の展示を中心として、茂吉の作歌姿勢の根幹に触れながら、絵画との関係などを示す作品・関連資料を紹介/会期 平成二十八年四月十七日から同年六月三十日/主な展示資料 茂吉原稿・書簡・絵図・平福百穂画ほか四十六点/関連イベント 館長ギャラリートーク「同年五月十五日(第四十二回斎藤茂吉記念全国大会時)」

◆「山 茂吉が見た原風景」

斎藤茂吉の実弟・高橋四郎兵衛氏の旧蔵品を中心に、山を詠み込んだ作品や往時の様子を垣間見る写真などを紹介する夏季特別企画展/会期 平成二十八年七月十七日から同年九月二十二日/主な展示資料 茂吉書(蔵王山頂歌碑原本等)・書簡(高橋四郎兵衛宛)・写真・蔵王山頂歌碑原寸大パネルほか六十二点/関連イベント トークショー「山城屋と斎藤茂吉」・資料寄贈感謝状の贈呈式・館長ギャラリートーク「ミュージアムコンサート」演奏 伊藤萌(トランペット)天野亮子(ヴァイオリン)伊藤真理(ピアノ)・ドリンクパーティー「すべて同年七月十日



特別展「山 茂吉が見た原風景」関連イベント(平成28年7月17日) ミュージアムコンサート(館内ロビー)

七日、会場は館内集会室ほか/会期中「山のスケッチ展覧会」を実施(見学者作品二十六点を館内ロビーに掲示)/単眼鏡無料貸出実施(貸出合計二四二台)

◆「茂吉と戦争 未刊の戦争詠歌集を中心として」

未刊に終わった斎藤茂吉の幾つかの戦争詠歌集の歌稿展示を中心として、その中から抽出された歌が同時代の既刊歌集に収められるに至った経緯などを歌集と歌稿を対比しながら紹介/会期 平成二十八年十月一日から同二十九年三月三十一日/主な展示資料 茂吉歌稿(『とどろき』『萬軍』等)・原稿(『満州遊記』等)ほか三十八点/関連イベント 館長ギャラリートーク「同年十一月六日(第十回定例歌会時)」

編集後記

本紙十九号のために、柴生田俊一・梅内美華子・森厚く御礼申しあげます。諸氏のご協力に本年度は、旧山城屋旅館主人・高橋四郎兵衛氏(茂吉の実弟)旧蔵の資料約千点を夏季特別企画展初日(平成二十八年七月十七日)付でご寄贈いただきました。茂吉自筆の書や家族に宛てた書簡など大変貴重な資料の数々は、今後も特別展などで逐次公開して参ります。

平成三十年春(予定)の斎藤茂吉記念館リニューアルオープンに向けて、いよいよ来年度の夏以降から本格的な工事を開始します。それに伴い、時期休館となり、ご見学の際はご迷惑をおかけしますが、何卒ご理解ください。新しい施設設備・展示にご期待ください。(編集担当 後藤・村尾)

Table with museum information: 利用案内 (開館時間, 休館日, 入館料), 交通案内 (JR奥羽本線, 山形方面バス).



この「茂吉記念館だより」は下記URLからもご覧になれます。 URL: http://www.mokichi.or.jp
「茂吉記念館だより」に対しましてご意見などはお気軽にお寄せください。 E-mail: kinenkan@mokichi.or.jp